



はこさて二人の恋の道行  
湯気のみこうに見え隠れ  
げに恐ろしき苦界の身の土  
二分やぎは五里霧中

彼女の顔が近付いてくる。カップ麺が伸びることは、おそらくもうないのだろう。

「説明するけど、その前に、おいしかったかどうか教えてくれる？」

隣へ寄り添い、俺に笑顔を見せた。

「わかった」

「……たぶん」

彼女はスープに沈んだ具を箸で探っている。

「今の話って重要？」

彼女と俺は、カップ麺を食べた。

俺が、三分ちよほどのカップ麺にありつく日はやってくるのだろうか。

がむしやらに友人は、カップ麺を食べ始めた。容器の中で俺のカップ麺が伸びる。

「むこうの浮気で別れた」

「はあ？」

「俺の元カノなんだ」

友人は腕時計を睨んでいた。

「おまえの彼女」

キッチンにカップ麺の容器が二つ並んでいる。

他愛無いおしゃべり。

「そういうの食べると舌がバカになるよ」

ケトルの湯を相伴し、カップ麺の容器に湯を注ぐ。

しかし、小腹は空いていた。

購入したケーキはひとつ。俺は甘いものが苦手である。

キッチンに立ち、彼女は紅茶を淹れていた。

カップ麺が伸びる条件は以下の通りである。

蓋を剥き、容器に湯を注ぐ。平らに戻し、蓋の端を折って固定した。携帯端末の数字がカウントダウンを始める。俺はキッチンの窓から外を見やっただ。生垣の向こうを女が歩いている。小さな白い顔を寒風にさらしていた。吐く息と黒いタイトルネックの妙。そして、俺のカップ麺が伸びる。

# 三分間の恋



恋は甘いからしょっぱい  
食べたおみやげりやわからない  
夢かまことかまこまこか夢か  
とかく浮世は地獄です



題名 小腹が空いたら三分間の恋  
作者 ドーナツ  
発行日 2015年2月28日  
連絡先 twitter: @donut\_no\_ana  
tumblr: http://donut-st.tumblr.com/

イラスト: <http://www.irasutoya.com/>

※自作の twnovel を改題、再構成しています。